

OR 1-1 高齢者におけるWHOの健康概念と心理社会的因子との関連

よしざわたけし
吉澤剛士 (女子栄養大学 栄養科学研究所)

宮城重二 (女子栄養大学 保健管理学研究室)

【背景】世界保健機関 (WHO) は、「健康とは身体的、精神的、社会的に完全に良好な状態であり、単に疾病または病弱の存在しないことではない」と定義しており、日本でも昭和26年以降この定義を踏襲してきている。この健康三要因を構成する観測変数の探索に関しては様々な取り組みが行われているが、いまだこの健康三要因の統一的な観測変数の確定には至っていない。そこで本研究では先行研究での課題点を精査しながら新たな観測変数の可能性を示唆した。またこの健康三要因はそれぞれが相互に関連しあいながら、人の生命予後を予測する妥当性の高い指標であることが明らかとなってきた。そのためこの健康三要因に影響を与える生活環境因子や心理社会的因子との関連は今後の保健医療においても重要な課題となっている。本研究では特に心理社会的因子に焦点を当て関連の検証を行った。

【方法】調査方法は、アンケート用紙を用いた面接調査で、集合法によって行った。対象者は沖縄県久米島に居住している65歳以上の健康的な高齢者である。アンケートを行った対象者から条件に合致しない者を外した結果、最終的な分析対象者は338名となった。健康三要因の観測変数は先行研究に準じて各健康要因に対し3つの観測変数で構成した。但し観測変数の内容に関しては新たな内容を加味している。この観測変数の検証には探索的因子分析及び検証的因子分析を用いた。心理社会的因子として配偶者の有無、笑い、世の中や社会への関心、経済意識の4項目を設定した。心理社会的因子と健康三要因との関連の検証には重回帰分析を用いた。

【結果】探索的因子分析では3因子が抽出され累積寄与率は47.84%であった。これら3因子の因子負荷量に基づいて、関与する観測変数との関係からその意味を判断した結果、第1因子は「主観的満足感」「生活満足度」「ストレス感」で構成され、精神的健康因子、第2因子は「外出頻度」「近所付き合い」「家族・地域への貢献」で構成され、社会的健康因子、そして第3因子は「治療中疾病数」「自覚症状数」「日常生活活動」で構成され、身体的健康因子と判断した。検証的因子分析における適合度ではカイ2乗値が34.125であり、その確率は0.082であった。GFIが0.978、AGFIが0.959、CFIが0.936、RMSEAが0.035となり、全てにおいて受容できる結果となった。心理社会的因子の中の「笑い」「世の中や社会への関心」が健康三要因に深く関連していることが確認された。

【考察】先行研究を踏まえながらより簡潔な新たな観測変数を用いることで健康三要因の妥当性が高められることが示唆された。また心理社会的因子の中で「笑い」と「世の中や社会への関心」は健康三要因に影響を与える重要なファクターとなりうる可能性が示唆された。

【結論】高齢者の健康三要因を構成する新たな観測変数の提言を行った。また健康三要因に影響を与える心理社会的因子として「笑い」と「世の中や社会への関心」を確認した。この研究成果を他の世代や地域でも検証すると共に、外的妥当性を高めることが今後の課題である。

E-mail ; yoshibond@gmail.com